

学校を
創る

地域に生きる・生かされる工業高校へ

県立東総工業高等学校長 なとり やすお
名取 康雄



1 はじめに

私は、県立東総工業高校の校長として二年目を迎えた。本校は旭市にあり、茨城県南部や千葉県東北部の企業に工業系の人材を送り出す地域唯一の工業高校である。今だに工業高校というとビー・バップ・ハイスクールを思い浮かべる人がいるようだが、生徒は活気を持ちながらも落ち着いた学校生活を送っている。

県内で工業と名のつく高校は4校（2校は定時制併置）、この他に工業系学科を持つ高校は4校ある。小・中学校の先生方はもちろん、高校の先生でも工業高校について理解している人は少数である。本校は、電子機械・電気・情報技術・建設（建築・土木）の4学科を持ち、早くから専門教育に入っている。赴任当初、1年生の電気基礎の授業で複素数や三角関数の合成、ベクトル等が普通に教えられていて、大変驚いた。また、国家資格取得の指定を受けた施設でもある。そのために履修・習得しなければならない科目がいくつかあるので、教育課程の編成を大きく変えられないという制約がある。

2 現状と課題

本校の今年の求人は1,700社を超え、旺盛な求人が続いている。土木系の公務員やJR東日本・新日鐵住金などの優良企業の求人が多い。少子高齢化の影響があるので、オリンピック後も求人数は堅調に推移すると予想している。進学する生徒もいるため、地域の企業からは自分の会社に入る生徒がないとのお叱りを受けることもある。

とはいえ、海匝地区は少子化の影響を確実に受けており、毎年30人程度の生徒減

がこれから10年以上続く。

生き抜く学校運営のためには、「ものづくりは、人づくり、国づくり」を合い言葉に生徒のために教職員一丸となってマンパワーを結集する必要がある。

そのためには、職員の意識改革を通じて、地域に欠くことのできない学校となることが重要と考え、次の①～③のことを実施している。

- ①生徒一人一人に寄り添える学校の実現に努める。
- ②ジュニアマイスターという称号等を目指して資格取得を通じた授業内容の質の向上と特色化を図る。
- ③学校内外の情報発信を充実し、有りのままの学校を知っていただくことに努める。

3 対応策

(1)職員一丸となって行事を行う

工業高校では、全国規模から県内規模まで工業科の年間行事が各科ごとにあり、検定も毎月ほぼ1回以上行っている。合計すると相当数の行事が行われているが、そのような工業科の行事に普通教科の教職員が関わるのがほとんど無かった。

そこで普通教科・工業科を問わず学校全体であたる行事を増加させている。

例えば昨年度までは、中学生の体験入学は工業科の教職員のみで対応していたが、今年度からは全教職員で対応することとした。

(2)若手職員の育成

若手の育成は、現在どの産業でも直面している課題である。本校では初任二年目から担任となることが慣例となっているの

で、担任として生徒・保護者に直に対応することになる若手職員の育成に力を入れている。なお、現場では自分の力で事に当たるように指導している。もちろんその背後には同僚・主任・教頭という幾重ものサポートが控えている。

研修への参加も奨励しており、総合教育センターでの研修に数多くの若手職員が参加している。本校には工業の教科研究員が複数いるので、それらの教員から学ぶ者もいる。

若手職員のグループによる（自主的なものも含めた）研修が盛んに行われている。

(3)資格取得

全国の工業系高校では3年間に取得した資格の質や数に応じて、ジュニアマイスターという称号が与えられる。本校生徒もその称号を目指して資格取得に取り組んでいる。資格によっては、社会人になってからも必要とされるものもあり、生徒も必死である。教職員も、授業中のみならず、部活動（ライセンス同好会）や補習等を通じて、資格取得を助けている。現在この教職員の取組を継続・強化するような体制づくりをしている。

(4)学力向上への動き

学力向上の要請は、就職先・進学先より前から要望されていた。本校生徒の状況からも義務教育段階での学びを再確認する必要があると判断し、今年度より朝のSHR前に10分の朝学習の時間を設置し、学び直しトレーニングや就職対策問題集を自主的に行うようにした。小・中学校時代からの習慣もあるのか、生徒は自主的に学習を行っている。監督者は学年の中で当番を決めて、学年全体を見守っている。

(5)業界団体との連携

工業高校は伝統的に業界団体との結び付きが強い。そのため、報酬は業界団体が支払う形での研修が毎学期2～3回ある。建設科では富士山麓の研修所に行つての生徒対象研修を夏季休業中に行っており、交通費を含めて生徒の負担はほとんどない。

他の科でも、ものづくりマイスターを講師に招き、1学期間かけて技術伝承を図っ

ている。予算も限られている中では、非常に有効な事業であり、製鉄業のように安全確保が難しいことからインターンシップができない業種でも仕事の実体験できるので、キャリア教育としても優れている。今後も、積極的にこのような連携の拡大を図っていく。



鉄筋組立ての実習風景

(6)外部機関等との連携

本校では県立八日市場特別支援学校に協力いただき、障害者対応を実践している。

また、高大連携では、千葉科学大学の教授による進学決定者に対する理系論文作成指導を1月に実施した。

今年度は、毎年生徒が進学している船橋情報ビジネス専門学校の授業の一環として、本校のホームページの作成をお願いしている。ホームページ発注の仕様書を考えることは、本校の強み・弱みを考える良い機会となっている。

その他、地元旭市との協力事業も多い。こども科学教室の開催や旭市主催の企業合同説明会への企画協力及び参加、旭市の祭りへの音楽部が出演等があり、地域との結び付きも強化している。

4 おわりに

本校は郡部の小さな学校であるが、小回りがきき、教職員の意気がそろいやすいという利点がある。これからも、校長以下全職員が一丸となって「こと」にあたるという伝統を作り上げ、地域に有為な「もの」を造る社会人を育てていく体制を作り、実践していきたい。



「児童・地域・教師みんなが 幸せになる学校」を目指して



銚子市立清水小学校教頭 寺本 貴幸

1 はじめに

本校は銚子半島のちょうど括れた部分^{くび}に位置し、学校のある台地に広がる農業地帯・住宅地域と利根川河口に広がる低地の商業・漁業地帯に二分される。戦災による被害から免れたことで、市内でも住宅密集度が比較的高い地域となっている。

漁獲量全国一の銚子漁港からほど近く、学校周辺には主要道路が集まっている。交通量も多く、交通安全は本校の大きな課題である。また、学校の南側、徒歩1分の所に銚子電鉄「本銚子駅」があり、電車で通学する児童も多い。この夏のテレビ番組での駅舎リフォームにより一躍全国に知れ渡ることになった。本原稿執筆時点でも観光客が絶え間なく訪れ、今や一大観光スポットとなっている。

家庭・地域の学校教育に対する関心は高く、PTA活動は自主的・協力的である。

ここでは本校の学校経営理念である「児童・地域・教師みんなが幸せになる学校」の具現化を目指した取組の一部を紹介する。

2 学校の課題・解決に向けた取組

(1) 単学級の増加による組織機能の低下に対する取組

本校は、昭和のピーク時には児童数が1,900名を超える大規模校であったが、少子化の影響もあり、現在では児童数183名の小規模校となっている。5年生を除く全てが単学級のため、経験の少ない若手でも、学年主任として一人で全ての学年分掌をこ

なさなくてはならず、組織が機能しづらい状況がある。

そこで本校では、若手の育成と組織機能の向上をねらいとし、低・中・高学年と特別支援学級を中心とした小集団（学年部）をつくり、組織として機能させる仕組みを取り入れている。具体的には各学年部の代表による隔週の総務会を開くことや、それぞれの学年部の中での交流活動などを行っている。これにより、学年の教育活動に対するPDCAサイクルの確立、生徒指導体制の機能強化（複数による指導）、OJTによる人材育成（ミドルリーダー、若手の育成）およびメンタルヘルス、不祥事防止、仕事量の均等化による多忙化の解消、学校経営への参画意識の高揚・チーム意識の向上などの効果が上がっている。

〈小集団・学年部〉

低学年部	1年1組・2年1組
中学年部	3年1組・4年1組・専科教諭
高学年部	5年1組・5年2組・6年1組
特別支援学級部	知的障害1組・知的障害2組 情緒障害1組・言語障害1組

(2) 学力向上に対する取組

① 授業について

本校では「ほめて伸ばすこと」を指導の基本としている。授業においては学習規律の徹底を図り、明確な指示とほめる指導を基本に取り組んでいる。また、「ユニバーサルデザイン」の考えを取り入れ、教室環

境を統一することや時間や内容についての見通しをもった授業を行うことで、全ての児童が安心して学習に取り組めるように配慮している。さらに、今年度からは授業に「ペア学習」を取り入れた。児童が二人一組になって議論し合ったり、自分の考えを説明し合ったりすることにより知識・表現力の向上を図っている。

②家庭学習の推進

学力向上のためには家庭との連携が重要である。本校では基本的な家庭学習の方法を家庭に周知することで、保護者の意識の高揚を図っている。さらに、「しみずテスト」を実施し、テストに向けて計画的に自主的な家庭学習に取り組むことで家庭学習の習慣化につなげていく予定である。

(3)特別な支援を要する児童への個に応じた支援の提供

本校は小規模校であるが、特別支援学級が4学級設置されており、21名の児童が在籍している。また、通常の学級にも支援を要する児童が在籍している。

そこで、年に一度「アセスメントシート」を実施し、児童個々の実態を把握するとともに、隔週の総務会および月に一度の「子どもを語る会」を通して情報を共有しながら指導にあたっている。また、特別支援補助員、学習サポーターを効果的に活用し、一人一人のニーズに合わせた合理的配慮を提供することで個に応じた支援を行っている。

(4)あいさつの向上

あいさつの向上を図るため、各学期に一度「あいさつ週間」を設定した。1学期には、「相手を見て、自分から」の頭文字を取り、「あじ」をマスコットキャラクターとしたポスターやシールを作成した。



作成したポスター

ポスターを掲示するとともに、「あじシール」を児童全員に配付し、名札に貼ることで、児童のあいさつへの意識の向上を図ることができた。この取組により、年度当初に比べ、相手を見て自分から元気に挨拶ができる児童が大幅に増加した。

3 教頭の役割～つなぐ～

以上、本校の取組の一部であるが、その中での教頭としての私の役割は「つなぐ」ことにあると考えている。回路をつなぐと電流が流れるように、人と人、人と物をつなぐことで物事は動き出す。設計者である校長の意図を理解し、回路が正常に機能するようにパーツをつなぐのが教頭の役目である。教頭として、職員と職員をつなぐ、保護者と学校をつなぐ、地域と学校をつなぐ、その仲立ちをすることで学校を動かす原動力になりたいと思いながら日々の実践に取り組んでいる。

4 終わりに

「寺ちゃん、『人』だよ。」かつて中学校の青年教師だった私が、当時の学年主任から言われた言葉である。放課後の部活動指導を終え、学校教育について雑談をしていたときの言葉であったと記憶している。教育現場において、人の温かさ、人を思いやることや人とのつながりの大切さ、人に対して誠実に接することの大切さを私に説いてくれた。それからというもの、自分が迷った時にはこの言葉を思い出しながら今日までやってきた。

そして現在、かつての学年主任は本校の校長として私たちを導いてくれている。若き日の私を導いてくれた校長の下で再び御指導いただける事に感謝しつつ、校長の理念である「みんなが幸せになる学校」づくりに精一杯取り組んでいきたい。

学校を動かす

「主役のために」教務主任としてできること

君津市立南子安小学校教諭

ひらかみ 平上
ひろゆき 浩之



1 勤務校について

本校は市内で児童数が一番多い学校で、576名の児童が在籍している（平成29年5月1日現在）。保護者の職業は多種多様で、ほとんどの児童は他地区からの移住者の子弟である。従来からの居住者の割合は1割に満たないため、保護者の価値観は多様である。児童本人及び家庭に課題を抱えた児童がますます増加しており、共通理解をしながら支援を続けている。児童の学力状況は、下位の集団がどの学年にも多く在籍している。そのため、全職員で日々の授業改善に取り組んでいる。

2 教務主任としての取組

学校の主役は、子どもたちと先生方

この言葉は、本校の校長の言葉である。担任が生き生きと授業をする。そうすることで子どもたちの現在と、未来が輝く。本校の課題の一つは、「学力」である。その課題解決のために教務主任として努めていることは、「担任が指導につく時間や教材研究をする時間を確保できるようにすること」である。主役を輝かせるために、教務主任として実践している内容や考えていることを述べたい。

(1) 突発的なことに備える

担任の家族や本人の急病、生徒指導等で担任が学級から離れざるを得ない時に、すぐに教務主任が変わって入れるようにしておくことが重要である。学級担任を補欠に充てるのは、教材研究・添削・ノート指導の時間を奪い、担当する児童の学力向上に

つながらない。そのために教務主任としての事務仕事は先を見て、素早く、的確に処理をするよう努力している。

(2) 担任の時間確保のための工夫

① 目標や手立ての絞り込み

目標申告、教科経営案、学年・学級経営案、週案等の乱立する目標や手立てを統合・整理した。

② 資料の印刷や綴じ込み

職員会議資料・教育計画・指導案等の印刷や綴じ込みは、スキャナ、プリンタ、帳合機を利用し、担任には行わせないようにしている。

③ 職員会議時間の短縮

事前に会議資料を配付し、各自読み込んだ上で会議を行っている。

④ 週1回の打ち合わせの時間の短縮

伝達事項はメールや書面を使い、顔を合わせて行う必要のあるものに絞って行っている。

⑤ 職員室・印刷室等の整理整頓

月に1度、物や資料の整理整頓をすることで誰もが使いやすい職員室になるように努めている。

3 終わりに

本校は校長・教頭を中心に、全職員が、「主役のために」尽力している。そして、様々な課題解決に向けて、精一杯取り組んでいる。教務主任として、職員一人一人が持っている力を十分発揮できる状況を生み出すべく、今後も日々努力していきたい。

教職員全員が意欲的に取り組む研修を目指して

 横芝光町立東陽小学校教諭 なめき 行木 ひろゆき 裕透


1 はじめに

3月末に研究主任を任されたとき、何をどう進めていけばよいのか漠然としたイメージしか浮かばず、不安しかなかった。そんな自分が研究主任として少しずつ不安な気持ちを打ち消し、前向きに取り組んできたことを紹介させていただく。

2 具体的な取組

(1)一人一授業で授業力向上

本校では、授業力（教師の力量）の向上のために、全員が学習指導案を作成し、互いの授業を見合うことにした。特に若年層の先生は、相互授業参観により、板書や発問、学習のルール、掲示物、学級経営など今後のキャリアに役立つ財産を得られたことだと思う。

(2)学力向上交流会検証事業校の指定

平成28年度より三年間の指定を受け、今年度の交流会に向けて、東上総教育事務所の指導主事に何度も要請訪問をお願いし、御指導していただいた。その中身の濃い研修の時間を過ごしていくにつれ、教員の授業に対する自信が高まっていったと感じる。

(3)教職員一人一人の参画意識の高揚

教員自ら考え、主体的に研修に関わっていくために三つの専門部に分かれ、学校全体で研究を推進していくようにした。授業研究部では、経験豊富な先生と、アイデアを出す先生方を融合させ取り組めるようにした。環境整備部では、図工や教材づくりが堪能な先生方に児童が興味をもつような校内の学習掲示物を定期的に作成や張替を行っていくようにした。調査統計部では、情報機器の操作が得意な先生方に児童アン

ケートの準備や集計、記録をお願いした。教職員が研究に関わり進めていく参加意識と成就感を高めることができた。

(4)基礎学力の定着

校内取組として朝のドリルタイム15分の内容を統一した。取組内容としては表のようにした。

表 朝のドリルタイム (15分)

月曜	読書タイム
火曜	算数のちばっ子チャレンジ100
水曜	読書タイム
木曜	国語のちばっ子チャレンジ100
金曜	復習や再テストの時間

このように計画的に進められ、基礎学力の向上につながった。

(5)家庭との連携

家庭との連携を図るため、家庭学習に関する学校・学年の方針や取組を家庭に伝え、保護者の理解や協力を得ること・連携を図ることを目的とした「学習便り」を保護者へ学年ごとに発行した。児童が間違いやすい問題の解き方や自学の取組がすばらしいノートの紹介をするなどし、保護者の学習に対する関心も高まってきているように感じる。

3 おわりに

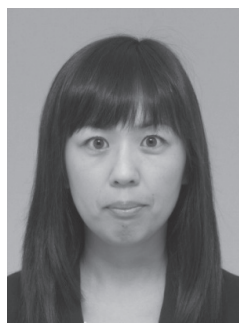
研究主任として、児童の学力向上を目指すためにはどうすべきなのか。児童に「わかった」「勉強って面白い」と意欲をもって学習に取り組んでもらえるような学校にするにはどうすればよいのか。まだ道半ばであるが、これからも目標に向かって、研鑽を積んでいきたい。最後に、東上総教育事務所の指導主事の温かい御指導と校内の先生方の惜しみない協力と熱意に感謝し、結びとしたい。

授業を
創る

多様な考えにふれ、 思考を深める道徳の授業

「魅力ある授業づくりの達人」認定教員
鋸南町立鋸南小学校教諭

いわさき ゆき
岩崎 由紀



1 はじめに

次年度からスタートする「特別の教科道徳」では、「考え・議論する道徳」の実践が求められている。児童が、道徳的価値の理解を自分との関わりでとらえ、他者と対話しながら物事を多角的・多面的に考えることが肝要となる。

そこで、児童が多様な考えに触れ、道徳的価値についてじっくり、そして深く思考することができるよう授業を組み立てることが必要だと考える。

2 実践報告

(1)主題

本実践では、「心と心のあく手」（出典：『私たちの道徳 3, 4年』文部科学省）を用いて、「相手を思いやり親切にすること」を理解させることにある。

(2)ねらいとする道徳的価値

本主題は、学習指導要領の第3学年及び4学年の内容2「主として他の人とのかかわりに関すること」の(2)「相手のことを思いやり、進んで親切にする。」に関わるものである。

第1学年及び2学年の指導の要点「具体的に親切な行為ができること」に対し、第3学年及び第4学年は「相手のことを考え、親切な行為を自ら進んでできること」が要点となる。

本学級の児童は、自分の考える親切が相手に受け入れられることと思い込んでいる場合も少なくない。このことから親切とは具体的な行為をすることという考えから一

歩踏み込み、他者の状況や立場を考える心遣いを通して、今できる最善の方法を選択することが大切であることに気付かせるために、以下の授業を組み立てた。

(3)資料について

主人公の「はやと」が、重そうな荷物を持った知らないおばあさんに出会い、手を貸そうと声をかけるが断られてしまう。納得のいかないまま家に帰ると、母はおばあさんが手を貸されることを断った理由を話してくれた。そしてその数日後、「はやと」は再びおばあさんに出会うこととなる。

おばあさんに何ができるのかを考え「はやと」のとった行動を通して、親切とは何かを考えていく内容である。

(4)展開

①道徳的価値の自覚に向けての動機付け

導入は、主題について学ぶ意欲を高め、道徳的価値の自覚に向けての動機付けを図ることが大切である。本時は、事前アンケートを活用し導入を行った。

事前アンケートで、「親切とはどういうことだと思うか」を質問したところ、「助けること、手伝うこと、優しくすること」など具体的に目に見える行為であると答えた児童が大半であった。しかしその一方で、「相手のことを思うこと、気遣うこと」といったように、行為そのものではなく、その裏にある相手を思う気持ちも「親切」であると答えた児童もいた。

そこで、アンケート結果を提示して、「親切」について見直すきっかけとした。

②イメージ化を図る

児童に資料の場面をより具体的にイメージさせるため、場面絵やポイントとなる言葉を話の流れに沿って提示しながら、教師が語り聞かせをした。また、資料の場面を明確に捉えさせるために、話している言葉と思っている言葉を区別して、イメージ化を図った。

③葛藤場面の設定

道徳的価値と自分自身の思いがぶつかりあうことを通して迷い・悩むことは、考えを深めることにつながる。

資料の中で、はやとのとったおばあさんへの行動を捉えさせ、おばあさんが断ったことに対するはやとの気持ちに共感させた。そして、おばあさんが断った理由を子どもたちに伝えたところ、迷いが生まれ、資料のことを自分との関わりで考え始めた。その後、おばあさんと再会したとき、この状況の場合「自分ならどうするか」と、葛藤場面を設けた。

このことが、自分自身と重ね合わせて「本当の親切」について考えることに繋がった。

板書は、授業の流れや学習していることが構造的に捉えられるように意図して書いた。例えば葛藤場面では、カテゴリー別に左右に書き分け、視覚的に自分の立場や友人の考えを捉えやすくした。このことが、本時の道徳的価値を、視覚を通して思考を整理する一助となった。

④多様な考えに触れる

多様な考えや感じ方に触れ、考えを深めることができるように、グループでの対話を取り入れた。



3・4人のグループを組み、どうすることがよいのか考えを交流した。話し合いでは、安心して自分の考えを伝えられることが大切なため、受容的に聞き合うことを確認した。自分にはなかった見方に触れるこ

とで、考えが広がったり、深まったりすることができた。グループによっては、自発的に動作化を取り入れて、おばあさんとはやと両者の気持ちを考えていた。

道徳的価値について互いの考えを交流させたことで、自分なりの考え方を持つことができた。

⑤価値の共有

資料の中にも出てくる『心と心のあく手』とはどういうことなのかという発問を通して、本時の道徳的価値について考えさせた。

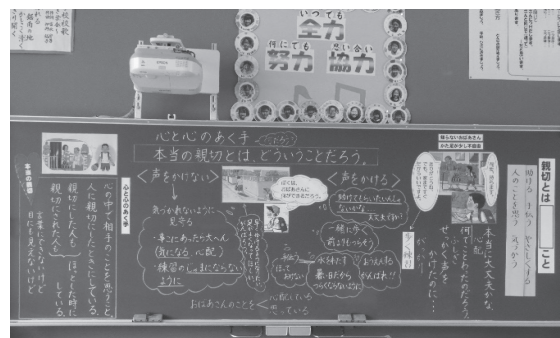
「声をかける」ことも「声はかけないが、見守る」ことも、おばあさんのことを考え、思っていることに違いはない。しかし、おばあさんの「歩けるようになるため、頑張っ

3 まとめ

終末では、本時の課題に対する思いや考えを深め、整理するために、まとめを書かせた。

そこには、「今思うと、心と心が握手した時があった」「今までは、ただ手伝うだけが親切だと思っていたが、相手の気持ちを考えることも親切だと話し合いをしてわかった」等の言葉が記されていた。

以上のことから、多様な考え方・感じ方に触れさせることは、より深く思考させ、道徳的価値を自覚させることに、効果的であったといえる。



子どもを知る

子どもから学び、共に成長していく

浦安市立高洲北小学校教諭 すずき こうへい 鈴木 孝平



教師は子どもを育てるが、教師も子どもに育てられている。私が初任を終えて最も強く感じたことだ。

昨年まで、教師とは子どもに教え続ける仕事だと思っていた。しかし、私自身も、様々な場面で、教師として子どもから学んでいた。初任1年目も終わろうとする頃、6年生を送る会で、私は教え方に行き詰まっていた。その時、初任者指導の先生から、教え込むのではなく、子どもの力を引き出すのだと教わった。そして、行事が終わった時、「またやりたい！」と多くの子が言い、私は強い手応えを感じた。その時、子どもを育てようと努力していたつもりが、私も教師として育てられたのだと気付いた。またある日、子どもたちが頻繁に「それ渋いね!」と言っていることに気が付き、はっとした。その言葉は、褒め言葉として私が子どもを評価する際に使ったことのある言葉であった。何気なく使っている言葉でも、子どもはそれを覚えていくのだということを強く感じた。このような体験から、教師として言葉を洗練させていく必要があると気付かされ、子どもと共に望ましい言語環境を作っていきたいと思う。

教師という仕事は、子どもとの関わりを通して、自分自身も大きく成長できる仕事なのだと痛感した。これからも子どもと共に成長していく教師であり続けたい。

子どもを知る

自己への挑戦

～生徒主体の指導を心掛けて～

県立東金高等学校教諭 くぼき さとし 久保木 怜

2年目の教員生活は「忙しい」の一言に尽きる。初めての担任業務に加え、昨年から引き続き顧問を務めることになった卓球部と、生徒会の顧問も受け持つことになった。初任者研修で学んだ、周囲と連携することの大切さを実感している。

昨年度は1学年副担任で、今年度はその生徒たちを引き続き受け持つことになり、2学年の理系クラスの担任をしている。廊下ですれ違った際の元気のある挨拶や、授業中の雑談に反応した生徒たちの笑顔など、日常的で何気ない関わりは楽しみの一つだ。

生徒会では、各行事の準備を行っており、生徒の学校生活全般に関係する責任のある仕事だ。過去の慣例から変えた方が良い部分に関しては、同じく顧問になっている先輩教諭や生徒会役員に助けられながら検討している。生徒たちを見ていると十分には改善出来ていないため、教員側から指示を出すだけでなく、生徒の話し合いによって案が出るように指導助言を行い、生徒主体の運営の活発化を図っている。

また部活動については、実技指導が必要だと感じるが、生徒会業務が忙しく、部活動を見に行く余裕がない。部活動の活動時間は確保できているので、今の実力をもっと伸ばすにはどんな練習をすればいいのかなどを部長中心に部員たちと相談をし、生徒たちの自主性をもとに活動している。

より効率的に業務をこなして教科指導や部活動指導等、生徒一人一人と関わる時間を確保している。これも周囲の先生方の協力があるからこそ多様な業務に対応出来ている。今後も、先生方の仕事への取り組み方を学ぶとともに教師として一層力をつけ、数年後は、同じような立場となった若手教員の手助けが出来るように、小さなことにも気を配り、一日一日を大切にしていきたい。